

本日の学び テーマ:「この岩の上に」 テキスト:マタイ16章13節-28節

【理解の手がかりとして】

イエス様は少数の弟子たちを伴い、フィリポ・カイサリア地方に旅された。その時は、イエス様とユダヤの権力層との対立が厳しくなっている時。この時のイエス様の関心事は、ご自身がはじめられた「神の国(天の国)」の宣教の業を弟子たちに継承させること、そしてそのために彼らの信仰を確認することであった。この箇所直後に記されているように、イエス様はご自身の苦難(十字架による死)を予知しておられた。イエス様はご自身の最期をよく知っておられたが故、弟子たちにその働きを継承させるため、彼らの信仰を問われる。

さて、当時の状況を少しばかり説明すると、そのフィリポ・カイサリア地方は、かつては農業神バルを礼拝する場所であったようである。ギリシャ・ローマ時代には多産の神の聖所が建てられ、自然崇拜の聖域であった。ヘロデ大王は紀元前20年に、ローマ皇帝アウグストからこの地を拝領し、その聖所近くに、皇帝の像を安置した白い大理石の大神殿を建立した。イエス様が旅をされた時もおそらく、荘厳なアウグスト神殿が大きくそびえていたことだろう。

イエス様は、弟子たちに「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」(13節)と尋ねる。弟子たちは、「洗礼者ヨハネ」「エリヤ」「エゼキヤ」「預言者のひとり」など、人々は言っていると答えた。イエス様はすかさず、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」(15節)と再び問う。ペトロは「あなたはメシア、生ける神の子です」(16節)と答えた。この告白はとても重要な意味を持っている。

皇帝礼拝が行われているその場所で、ペトロの口からはっきりと「あなたこそメシアです」との告白がなされた。そこには「神ならざるものを神とする」ことを断固として拒否する決断を見る。このことは様々な異教的な環境に身を置く私たちにとっても、とても大切な問題である。私たちも、日々の生活の局面で、イエス様から問われている。「あなたはわたしを何者だと言うのか」と。※「2.11 信教の自由を守る」運動から考えてみても良い。

このペトロの信仰告白は、イエス様にとっても重大な転機となった。この時からイエス様はご自身の十字架の道を示し始められることになるからである。…しかしイエス様は、なぜ「御自分がメシアであることを誰にも話さないように」(20節)と命じられたのか?…それは、イエス様の苦難と十字架を見ることなしには、人々の間に大きな誤解を生むだけだと考えられたから、と理解する。

イエス様はペトロに、「あなたはペトロ、わたしのこの岩の上にわたしの教会を建てる」(18節)と言われた。「ペトロ」は男性名詞で、それに対応する女性名詞「ペトラ」は「岩」という意味になる。では、「この岩の上に」とは、ペトロ自身のことか?その後「天の国の鍵」(19節)が出てくる。ここはローマ・カトリック教会が、教皇をペトロの後継者とみなし、教皇の権威を聖書的に根拠づける箇所になっている。しかし、この「岩の上に」とは、ペトロの信仰告白の上に、ということであり、パウロがコリント信徒への手紙で「イエス・キリストという既に据えられている土台」(1コリント 3:11)と言っているように、根底は「イエス様ご自身の上にある」と理解するのが正しいのではないかと。

イエス・キリストの教会は、この信仰告白の上に、すなわち「イエス、あなたこそキリストです」という告白の上に立つ。ペトロの告白は、皇帝礼拝や自然崇拜の歴史や状況の中でなされた。その告白の上に立つ時、様々な困難が待ち受けていた。事実、教会は、迫害や殉教の嵐に直面して行くことになる。イエス様が言われた「陰府の力もこれに對抗できない」(18節)という宣言が、後の教会に大きな励ましと希望を与えるものとなったのは間違いないだろう。

しかし、ペトロの「メシア(キリスト)」告白は、まだ彼自身の中で不十分だったと言える。「あなたはメシア、生ける神の子です」(16:16)という告白は、確かに的を得た(天の父が彼に語らせた)告白だったけれども、しかしペトロ自身の信仰(他の弟子たちの信仰も含む)は、イエス様の願われる所(深み)までは至っていなかったと考えられる。その直後にイエス様が語られた受難予告に対し、ペトロが余りにも無理解な返答をしているから。

イエス様は、御自分の進んで行かれる道に待っている事を予告なさる。「必ずエルサレムに行くこと」「長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺されること」、そして「三日目に復活すること」である。「エルサレム」、それはイエス様にとって、行けば必ず苦しみと遭い、しかも殺される危険がある、そんな場所であることが分かっていた。でも、イエ

ス様は「私はそこに行くのだ」と予告なさった。なぜなら、それがイエス様の使命、この世にお出でになられた目的を果たすために不可欠の事だったから。

しかし、それを聞いたペトロはどうしたか。彼は、イエス様を「わきへお連れして、いさめ始めた」(16:22)。直前には立派な告白をしたばかりのペトロ。しかしこの時の行為は、まるで自分がイエス様の上に立つ存在であるかのように、イエス様を咎めようとする。彼は言った。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」(16:22)と。これは、ペトロの善意、イエス様を愛する思いから出た正直な思いだっただろう。けれども、この時ペトロには、神様の大きい計画が少しも理解できていなかった。

彼はイエス様の「三日目に復活する」という言葉は耳に入らなかったのだろう。エルサレムで苦しみを受けて殺される—それがペトロの心を支配し、「そんなことはとんでもない」と言わずにはいられなかったのだろうと思う。私はこのペトロの心情をよく理解できる。私もその場にいたならば、そう言ったかもしれない。「殺されるために行くなんてとんでもない」って。しかしそれはあくまで私たち人間の思いであって、神様の御心とは違うもの。

ペトロに対し、イエス様はこう言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」(16:23)と。このことは私たちにとっても大切なことを教えてくれる。私たちも自分の善意を第一に考えて行動することがある。しかしそれが本当に神様の御心に適うものでなければ、独りよがりのものとなり、結果として悪い方向へ、神様の計画を邪魔することへなってしまうこともある。大切なことは、神様のことを思っていることなのか、それとも所詮自分自身の満足を求めていることなのか、熟慮する必要がある。

ただイエス様はペトロの全人格を否定されたのではないと思う。ペトロの内側にあるサタン的なもの、すなわち神様を第一とせず、人間の思いで行動しようとする、そのところを叱られたのだろう。イエス様は、イエス様の弟子たるものはこうでありなさい、と示すためにペトロを叱り、そして、本当の弟子たる者のあるべき生き方をお示しになった。それが次の有名な言葉。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(16:24)。

25-26節でイエス様が言われているが、私たちの命は、私たち自身で救えるものではない。私たちの命を、この世の人生に留まらず、永遠の命へと導いて下さる方は、イエス様以外ない。そのイエス様が、「わたしに従いなさい」と招いておられる。私たちは日々次のように祈れたらと思う。「主よ、どうかこの一日、私のためにではなく、主なるあなたのことを思って過ごすことが出来ますように。今日のすべての行動に先立って、自分が何をしたいか、ではなく、主が私に願われることを行うことが出来ますように。主のために、隣人のために、私自身をささげて過ごすことが出来ますように」と。

【聖書教育より】

「教会と弟子は、天の国の門を閉ざしてしまう『ファリサイ派の高ぶり』ではなく、キリストの遜りを持って、キリストと共に十字架の道を歩む者として招かれたのです。」(聖書の学び～十字架の道)